

## 戦前～戦中～戦後の日本の基督教会

## ～国民儀礼～

海老坪 眞

(Ⅰ) 明治維新後の二大戦争 ④【本論では年代表記を明治・大正・昭和を用いた】

表題“戦前～戦中～戦後の日本の基督教会”を語るには明治維新以後に起こした明治 27～8年の日清戦争と明治 37～8年の日露戦争にも基督教会は無縁ではなかった点を指摘する。例えば戦争肯定論者の海老名弾正・植村正久・本田庸一・井深梶之助等と非戦論者の内村鑑三・安部磯雄・柏木義円等とに別れて国の動向に関わっていた。【内村は日清戦争迄は非戦論者ではなかった】

(Ⅱ) 明治から大正への狭間

二大戦争に勝利した為に精神的弛緩を齎した国民を見た政府が企画した三教会同も“戦前～戦中～戦後の日本の基督教会”を語るに無視出来ない歴史的一頁だった。明治 45 年 2 月 25 日、三教会同には教派神道 (13 名)・仏教 (51 名)・基督教 (7 名) (井深梶之助・本田庸一・千葉勇五郎・宮川経輝・元田作之進等) が招ねかれた。その席上で原敬内務大臣は「国民道徳の振興」と「社会風致の改善」を説いた。翌 26 日、神仏基の代表者は自主的な会合を開き以下の決意表明をした。即ち「我等は各々その教義を發揮し、皇運を扶翼し益々国民道徳の振興を期す」と。但しこれは前日の原敬の二番煎じだった。

(Ⅲ) 大正デモクラシーとは言うけれど

三教会同から半年にして明治から大正に移る。その後僅か 3 年、世界中を混乱させた第 1 次世界大戦 (大正 3 年) に際しての日本の立場は日英同盟を理由にドイツと戦ったり、大正 7 年にはシベリア出兵もした。

内村鑑三はこの大戦を「神が暴虐に満ちたこの世に対する刑罰」と述べた彼が起した運動はキリストの再臨が戦争を廃めさせるという信仰からの運動で

あって教会の革新を要求する再臨運動であり、キリストの十字架を中心とし再臨を終局とする福音伝道を自分の天職と固く信じての運動であった (大正 8 年 11 月 7 日の日記)。

吉野作造はこの大戦後 (大正 10 年) 中央公論に靖国神社批判論を語り、また日本基督教会大洲教会の大正 9 年 10 月 31 日の週報には、天長節礼拝として君が代も歌っていた。これこそは国民儀礼の初めではなからうか。【讚美歌の巻末に明治 22 年から敗戦までは「君が代」が“便宜上ここに収む、本書の歌にあらず”として載っていた。

(Ⅳ) 昭和に入ると 15 年戦争とも言うけれど昭和 2 年から中国山東出兵にはじまり、昭和 6 年に満州事変、翌年 1 月には上海事変。3 月に満州建国宣言。昭和 8 年に国聯脱退とエスカレートした。この満州事変から昭和 12 年の支那事変を経て昭和 20 年大東亜戦争無条件降伏迄を 15 年戦争と言うが、私は日清戦争からの戦史を 50 年戦争とする。支那事変には中支宗教大同連盟 (神仏基) の中で基督教は主に欧米宣教師の対日世論是正仕事を担当したが不完全燃焼に終わった。矢内原忠雄は支那事変直後、支那侵略を批判する「国家の理想」を発表したが発禁処分、東京帝大を辞した。彼は「国家の理想」発表より相当前から大陸政策批判者であった。

(Ⅴ) 「皇紀二千六百年奉祝全国基督教信徒大会」と宣言文の謎

昭和 15 年 10 月 17 日に青山学院校庭で行ったこの大会で阿部義宗の説教には「日本の基督教徒は新天新地の黙示を見ている。皇紀二千六百年の皇運を喜ぶ集まりであると共に、日本の基督教の歴史におけるペンテコステである。教会合同の黙示は日本独自の神の恩寵である」と語る。千葉勇五郎は「一心一体祖国の使命達成の為に、御国建設の為に、我らの身も魂も尽くす事をゆるして下さるように。新しき天と新しき地を地上に実現する者となる事ができるように」と祈った。

大会宣言文は前夜迄「基督信徒ノ大同團結ヲ完成センコトヲ期ス」だったが当日には「吾等ハ全基督

教会合同ノ完成ヲ期ス」と急変。この秘話の解説を述べる余白が無いのは残念。

(VI) 日本基督教団誕生は昭和 16 年 6 月 24 日

誕生はしたものの教団規則の政府認定（昭和 16 年 11 月 24 日）に半年を要した。認定の条件として上申書（早期部制廃止等）を提出。教団認定後 14 日目、大東亜戦争突入、翌昭和 17 年 1 月 2 日の閣議で毎月 8 日を大詔奉戴日と決め、戦争完徹を祈願するようにと発令した。その事の前に昭和 15 年 10 月 12 日に大政翼賛会中央協力会議で一議員が「宮城遙拝」云々を「国民儀礼」と発言。また昭和 16 年 12 月 5 日の東京日日新聞に「土曜半ドン何事ぞ・全国民挙って毎日『国民儀礼』を！」とあった。

「大詔奉戴日」の初めての 8 日が昭和 17 年 1 月 8 日、その日には大詔奉戴宗教報国全国大会に基督教側からは富田満等約 300 名参加。次に 2 月 8 日は日曜日であり諸教会では如何に対応したか。霞ヶ丘教会での週報を回覧しますが礼拝冒頭に「宮城遙拝・黙禱・詔書捧読」そして奏楽・頌 566 と進めた。霊南坂教会百年史にも類似の行事の記述がある。

(VII) 国民儀礼の方式

霊南坂教会百年史では：1、鐘鳴る、会衆起立、不動姿勢を取る。2、教職者入場。3、鐘止む、会衆右向け宮城を向く。4、国歌奏楽 総員最敬礼。5、キーミーガーアーヨーオーハーまで済むと 総員直れ、上体を起こす。6、国歌奏楽中そのまゝ黙禱（出征軍人傷痍軍人戦没軍人並軍人遺族の為、又大東亜戦争完遂の為）。7、国歌奏楽終る 会衆左向け。8、教職者着席。9、会衆着席。10、礼拝開始奏楽始まる。

昭和 17 年 12 月 15 日の「教団時報」に「国民儀礼の作法」詳細があるけれど略す。

(VIII) 日本基督教団神奈川支教区長川又吉五郎は昭和 17 年 8 月 31 日に招集した市内主管者会で「9 月第 1 日曜日の礼拝より国民儀礼を実行する事」を決めた。それを忠実に 9 月 6 日の第 1 日曜日から実行した霞ヶ丘教会の週報を保持している。

(IX) 教団は「国民儀礼実施通達」を昭和 17 年 12 月 10 日に通達したがその背景に注目。同年 11 月 26 日に教団統理富田満は天皇に拝謁し、12 月 8 日に令達第 3 号で「畏クモ聖上陛下ニハ特別ノ思召ヲ以テ 11 月 26 日各宗教団体代表者ニ拝謁ヲ賜ハリ、本職モ・・・其ノ光荣ニ浴シ洵ニ恐懼感激ニ堪エザル所ナリ。以下略」とあり、そこで同年 12 月 10 日

の総発第 96 号には「近來教会ニ於テ礼拝前に国民儀礼を実行シツツアルハ洵ニ喜バシキ事ニ有之候就テハ・・・我等ノ教団統理者ガ賜閱ノ光荣ニ浴シタル此ノ機会ニ、一同感激ノ誠意ヲ披歴シ之ガ全国的実施ヲ決意致度ク茲ニ御通達申上候」とあった。

(X) 横浜ホーリネス教会一信徒の不思議な態度

横浜ホーリネス教会が活動禁止され、霞ヶ丘教会では彼等との交わりを共にしていた。その中の E. N 大学生は時間に余裕があっても礼拝堂に入らず遠方を眺めて立っているばかり。その事で 20 年程前に質問した所、北陸に住む E. N からの返信で私の感が当たって「国民儀礼が終るまでは入らなかつた」と言う彼は後日、神宮外苑での学徒出陣式には意図的に欠席したとも（この書簡は大切に保管中）。

(XI) 昭和 19 年 4 月 9 日「大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書簡」

この書簡以前に「布教指針」では「必勝ノ信念ヲ昂揚シ・・・総力ヲ拵ゲ・・・聖戦目的ヲ完遂セザルベカラズ」と。そして問題の「大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書簡」では「わ

が日本の聖戦の意義をいよいよ明確に表示し・・・諸君の民族がこの大聖戦に我等日本と共に・・・所期の目的を達成するまで・・・」と述べている。

(XII) 最早余白少なく日曜学校の教師の友等を略し、敗戦直後昭和 20 年 8 月 28 日の令達 14 号で「聖断一度下リ畏クモ詔書ノ渙発トナル而シテ我國民ノ進ムベキ道茲ニ定マレリ。本教団ノ教師及ビ信徒ハ此ノ際聖旨ヲ奉戴シ国体護持ノ一念ニ徹シ・・・我等ハ先ヅ事茲ニ到リタルハ畢竟我等ノ匪躬ノ誠足ラズ報國ノ力乏シキニ因リシコトヲ深刻に反省懺悔シ・・・我等ハ左記ニ留意シ信徒ノ教導並ニ一般國民ノ教化ニ萬全ヲ期スベシ。一、承書必謹 コノ際一切ノ私念ヲ棄テ、大詔ヲ奉戴シ・・・皇國再建ノ活路ヲ拓クベシ」と。要するに『私達の努力不足で敗北した事を深く反省・懺悔します』は天皇へであり、更に次の「一、承書必謹」（「天皇の言う事を謹んで承ろう」）が敗戦後の第一声であった日本基督教団。因みに「赤旗」戦後第 2 号には既に「天皇制打倒」を唱えている。

最後に昭和 47 年 3 月 26 日に教団総会議長鈴木正久が諸教派の中で最も早く戦争責任告白したのは評価するが、戦争に協力したことの責任が告白されているだけで、・・・『神でないものを神とし』た罪については一言も触れられていないのは残念だった。

## 運上所内英学所

権田 益美

### はじめに

1858(安政 5)年、T. ハリス(T. Harris)により日米修好通商条約が締結されるとアメリカでは、教会各派から日本へ宣教師を派遣する動きが出てきた。ヘボン(James Curtis Hepburn, 1815-1911)とその妻クララ・メアリー・ヘップバーン(Clara Mary Hepburn, 1818-1906)は、1859(安政 6)年自ら志願し日本へのキリスト教伝道に赴いた。

ヘボンは、医師として活躍したばかりでなく、英学所や彼の私塾である英語教育にも力を注いだ。彼が参画した英学所は1862(文久 2)年に「運上所官舎前」に設立された。日米修好通商条約締結を契機に、幕府は対外政策に対応しうる外国語(特に英語)の習得が必要であると痛感していた。その具体的措置の一つが、外国との取引のフロントになる運上所役人の英語力の向上にあった。そのため当該業務に関わる人材の育成が当面の課題になった。

### 1. 横浜開港場における運上所の開設

1858(安政 5)年の「安政五カ国条約」の締結に伴い幕府は5名の外国奉行を任命した。開国の準備は外国奉行が中心となり進められた。翌1859(安政 6)年、横浜開港と同時に外国奉行は神奈川奉行兼帯を命ぜられ、5名の外国奉行のうち2名は神奈川に交替で勤務することになった。神奈川奉行所の機構としては、戸部役所・運上所・神奈川詰の三カ所からなる。その一つ運上所の創設は、日本における税関業務の開始を意味すると考えられる。運上所では、港を出入りする船舶の管理や貿易、関税関係事務を中心に、外交関係の実務的側面が担われた。神奈川奉行所設立の2年後、1860(万延元)年には、神奈川奉行は2名が専任となった。

「日米修好通商条約」の第3条に「雙方の国人物物を売買する事総て障りなく其沸方等に付ては日本役人是に立会はず」とあることから、列強にとっては自由貿易であり、日本側に不平等な内容が押し付けられた。税関手続きについては、条約とは別に、貿易章程が各国領事との間でとり決められた。その結果、入港手続・出港手続・船貨の荷場・通関・過料・手数料・関税率等は5カ国間の議定事項になっ

た。しかし、現実には、外国人商人、領事と運上所役人の間にトラブルがたえなかった。そのトラブルの一つにことばの問題があったので、運上所では業務を円滑に遂行するために英語を使いこなせる人物の養成が求められた。特に通詞等の養成は、職務上急務極まりない状況にあった。通詞の仕事は貿易業務全般に及んだ。そうした業務が円滑に進められるためには、的確に対応できる英語力が必要不可欠になった。優秀な人材を育成するために、幕府はヘボンをはじめ信頼できる外国人の指導が必要であると考えた。

### 2. 運上所内の英学所一設置場所

運上所の設置場所についてであるが、『横浜沿革誌』1862(文久 2)年の記述をみると、「運上所前官舎ニ英学校ヲ開校シ・・・」とある。この記述より1862(文久 2)年には、運上所前に英学所が設置されていたと考えられる。その設置場所については、1865(慶応元)年に普請役の市村貫吉よって描かれたと伝えられる「御役所其外地割絵図」を見ると、運上所は、現在の神奈川県庁(横浜市中区)の地に建てられたことがわかる。この絵図より、運上所前に英学所があったことも確認できる。「元外国方調役御役宅当時英学所」とあるのは現在の横浜地方裁判所のあたりである。この史料からも、慶応元年の時点では、運上所前に英学所が設置されていたと考えることができる。

翌年の1866(慶応 2)年に通称「豚屋火事」が発生し、開港以来発展してきた横浜の地の多くは焦土と化し、この火事で英学所も焼失した。1867(慶応 3)年には運上所のあった土地の向かいに石造二階建の新庁舎が建設され、「横浜役所」が開設され、運上所の主な職務は「横浜役所」に引き継がれた。通称「豚屋火事」の発生以降、英学所は弁天社隣に設置されたとする説がある。一川芳員による「横浜明細図」にも弁天地区に「語学所」と表記された場所がある。しかし、この地図上の表記は「語学所」となっているので、それを「英学所」が移転し名を改めたものであると考えるか、また幕府が新たに設置した「仏学所」を「語学所」と考えるか、諸説わかれるところである。また英学所の閉鎖時期についても移転の有無に伴い、1866(慶応 2)年とする説、1868(明治元)年までとする説にわかれる。

### 3. 英学所の運営とヘボンのかわり一担当講師の活躍

英学所開校当時の教師は、『横浜沿革誌』によると、「ブラウラン並神奈川奉行手附翻訳方石橋助十郎、太田源三郎等を教師とし・・・」とある。ここでのブラウランは S.R. ブラウンのことである。来日時には、医療宣教を中心に展開したヘボンであるが、運上所の運営にあたっては、英語教育について知識経験ともに豊富な S.R. ブラウンと協力して運営を進めていった。

日本人教師の一人太田源三郎は長崎唐通事であった。長崎で英語の力を付けた太田は、1861(文久元)年に神奈川詰を命じられ、外交交渉に従事した。同年、太田は定役並通弁御用として遣欧使節(箕作秋坪、松木弘庵等)に随行、ロンドンのキングス・カレッジ(King's College)病院では通訳をおこなった。帰国後、1862(文久2)年に、太田は英学所教師として迎えられた。英語のできる人材として認められたのである。

もう一人の日本人教師石橋助十郎(後に政方と名乗る)は、1862(文久2)年に英学所の講師に任命された。長崎出身の石橋助十郎は、オランダ通詞として代々仕える石橋家に、生まれた。長崎で英語を学び、1859(安政6)年神奈川詰を命じられ、神奈川奉行支配として外交交渉・翻訳に従事した。英学所教師への採用は、彼の英語力はもちろんのこと、1861(文久元)年に英単語・会話書『英語箋』を著していることも要件になった。

ヘボンの J.C. ラウリー(Lowrie)宛の書簡をみると、英学所についての記述も多数みられる。まず、ヘボンは英学所について、「わたしたちが組織したばかりの学校」と記している。この記述はまさに英学所とヘボンの関係を鮮明に結びつけるものである。英学所が開設して2年経った1864(元治元)年にはクラスは3クラス、生徒数は25名を数えた。S.R. ブラウンは開設当初から授業を担当し、1864(元治元)年の段階では文法のクラスを担当していた。宣教師は毎日1時間ずつ授業を担当した。バラはABC(初級クラス)を、タムソンは算術を教えていた。その段階では、ヘボンは「教授陣は充実していた」ということで、直接授業を担当することはなかった。その翌年の1865(慶応元)年3月に、S.R. ブラウンが長崎に出張することになり、その間ヘボンが毎朝1時間英語を教えた。英学所での教科書には、S.R.

ブラウンがまとめた『会話日本語』(*Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese, together with An English-Japanese Index to serve as a Vocabulary, and An Introduction on the Grammatical Structure of the Language.* Shanghai, Presbyterian Mission Press, 1863.)が使用された。その教科書の内容を整理してみると、序文、日本語の音声とローマ字による表記、文法の説明、英日対訳による会話文、対話、補足説明、索引の項目に分けられている。その中でも会話文は、172頁にも及ぶ。まず英語の短文を挙げ、訳文はローマ字表記で日本語の発音を示し、続いてカタカナ表記で会話文を表記している。

ヘボンの書簡では、その時の生徒は運上所の通訳や政府の役人であり、彼らは英語の教科書を通して聖書の真理を学ぶ機会もあったと記されている。その意味では、禁教下といえ、英語学習を通じて政府の役人たちまでがキリスト教についてふれる機会があったといえる。1865(慶応元)年の段階になると、カリキュラムも充実し、英語学習にとどまらず、タムソンが担当していた授業は算術と求積法を終え、代数の取り組みを始めた。同年6月には、英学所のクラスは5クラスに増設され、生徒数は40名を数えた。再びヘボンは教壇に立ち、地理を担当した。英学所の授業は一層充実し、英語を使って地理や数学を教えるというカリキュラム編成をみた。当時の運上所の業務を鑑みると、外国との交渉において、英語を使って地理や数学の知識を習得することは必要不可欠であったと考えられる。この年の秋には、ヘボン夫人のクララも英学所の教壇にたつ機会を得た。当時の日本では女性が教壇に立つことは前例がなかった。彼女の登壇は、アメリカで教師経験があり、その実績がかわれたものと思われる。

### まとめ

運上所内英学所での英語教育は優秀な人材を育てるきっかけとなった。運上所の英語教育をうけた主な人物としては、三宅秀、益田孝、大鳥圭介、星亨、安藤太郎等があげられる。

ヘボンの英語教育は、時代を経て変化を遂げる。神奈川在住時の幕府より委託された若者への教育に始まり、運上所の英学所、横浜居留地におけるヘボン塾とそれぞれその内容は異なる。それに伴い英語

習得をめざした者の、職種や学習目的もまた多岐に渡っている。幕府より派遣され英語習得に努めるが、召集が掛かりやむなく戦いに赴く若者、英語を生かし貿易を目的とし海外進出する商人、明治時代を迎え英語力が評価され政府の役人となる者等、そこには一つの近代の職種を通して展開する人間模様がみられる。教師としては、ヘボン、クララ夫人、タムソン、S.R. ブラウン等を取りあげた。幕末から明治にかけて英語を学ぶことを通して欧米の文化を受容しようとする日本人と、英語教育を進めることで禁教下といえどもキリスト教布教活動のきっかけを掴もうとするヘボン、その両者が相互に影響し合う中での「日本の近代化」について考察を深めた。

## ちりめん本と シドニー・ルイス・ギュリック宣教師

榎本 千賀

ちりめん本『わたしの日本語』は、明治 28 年 (1895)、S.L.G が Kelly & Walsh を販売元として出版したちりめん本である。大妻女子大学草稿・テキスト研究所で、このちりめん本を購入する機会を得たので、本資料について考究したい。

本資料の主な先行研究には、石澤小澤子氏の『明治の欧文挿絵本 ちりめん本のすべて』と、京都外国語大学の『文明開化期のちりめん本と浮世絵』がある。

石澤小澤子氏の『明治の欧文挿絵本 ちりめん本のすべて』には、『わたしの日本語』について次のように記している。

絵師も、著者もどういふ人なのか今のところ不明である。もしかしたら Sidney L. Gulick ではないかとも聞いたが正確にはわからない。Gulick Family は日本にも来た宣教師なのだが、この本の著者は軍人のように思われる。奥付もないので発行の日付もわからないが、本の趣向などから考えれば「おゆちゃん」「小花三」などと似ているので一八九〇年代の始めではないかと推定する。本学所蔵のものは表紙に Kelly & Walsh 発行と明記されている。(中略) こうした一冊を作ることを認めたのは、武次郎にさえ外国人に対して卑屈に振る舞うことを許す気持ちがあったのだろうか。どこにも弘文社の名

がなく、表紙に Kelly & Walsh と明記されていることから想像して、これは上海で勝手に出版されたものと考えたい。

次に、京都外国語大学『文明開化期のちりめん本と浮世絵』では、本資料について、以下のように記している。

『わたしの日本語』(Watashi no nihongo)

著者：S.L.G. (Author：S.L.G.)

絵師：不明 (Illustrator：anonymous)

出版者：ケリー・アンド・ウォルシュ社  
(Publisher：Kelly & Walsh)

### ■ 解説

標題紙も奥付もなく、著者や絵師は不明である。しかし、裏表紙の右下に縦 3.8cm、横 2.3cm の朱印が押され、版權所有を示す文字があり、「明治廿八年五月十日印刷、全月十三日發行、東京市神田區元岩井町十九番地、發行[一字判読できず]、印刷者廣瀬せい」となっており、さらに表紙にはちりめん本を出版する長谷川弘文社の総代理店の Kelly & Walsh が発行したことが印刷されているが、これ以外に長谷川弘文社と関係づけられる事柄は記載されておらず、出版の経緯などはわからない。また、著者については表紙に“WORDS & MUSIC BY S. L. G.”とあるが、このイニシャルから人物や団体を特定することは難しい。出版年は「明治廿八年五月十日印刷、全月十三日發行」に従うならば 1895 年となる。

内容は“a topical song of Japan”と副標題が付けられた歌集である。冒頭に 4 頁のピアノ楽譜があり、この楽譜中に 1 番の歌詞が入れられている。楽譜の後には挨拶、お茶屋、人力車夫、骨董屋、乞食、旅券点検の場面を歌う 1 番から 6 番までの詩が、内容に合った絵とローマ字綴りの日本語を英語で紹介した“glossary”(用語解説)と共に見開き 2 頁に書かれている。書名の“My Japanese”はこの用語解説を指すものであろう。

このように、『わたしの日本語』は、ちりめん本を世に広めた長谷川武次郎の名前がないこと、訳者や版元がはっきりしないことから、これまであまり着目されてこなかった。しかしながら、京都外国語大学の解説では、裏表紙に「印刷者廣瀬せい」の押印があることを指摘している。本資料にも同様の奥

付の代わりの朱印があることから、これを1つの手がかりとして、版元や訳者について述べていきたい。

まず、最初に、本資料の書誌について簡単に触れておく。

### 【書誌】

〈外題〉 わたしの日本語 MY JAPANESE

〈内題〉 MY JAPANESE

〈著者〉 S. L. G

〈出版社〉 KELLY & WALSH L' d.

〈寸法〉 縦 20.7センチ 横 16.7センチ

〈体裁〉 袋綴

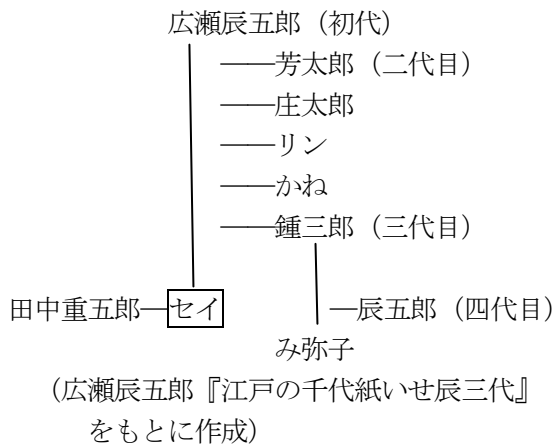
〈丁数〉 10丁 (9丁目表はキラ刷り)

〈その他〉 表紙の左下に「神田辨慶橋/伊勢辰發行」、裏表紙の右下に「版權所有/東京市神田區元岩井町十七番地/明治廿八年正月十日印刷/全年全月十三日發行/定価金五十錢/發行兼印刷者 広瀬せい」の朱の押印があり、裏表紙が奥付の形式を再現している。

印刷者の「広瀬せい」は、江戸千代紙の版元「いせ辰」の初代広瀬辰五郎の妻である。初代広瀬辰五郎は、明治3年(1870)に念願の「神田辨慶橋」(現在の千代田区岩本町二丁目)に店を移した。裏表紙に記載のある「神田區元岩井町」は、「神田辨慶橋」のすぐ傍にあった。『江戸の千代紙いせ辰三代』によると、「いせ辰」の通称は「辨慶橋」だったという。「いせ辰」の初代広瀬辰五郎は明治21年(1888)に死去し、そのあとを息子の芳太郎(二代目)が継ぎ、母せいとともに店の発展に尽くした。本資料が、明治28年に製作された時、芳太郎は、まだ仕事を覚え始めたばかりだったため、母せいの名前を印刷者としたのではないだろうか。その後、「いせ辰」は、大正12年(1923)に関東大震災に遭い、昭和17年(1942)、震災が起こっても地盤が丈夫な現在の谷中に店を移し現在に至る。以上から、本資料は、「いせ辰」版であり、長谷川武次郎とは別の版元が製作したちりめん本であると指摘できる。

なお、「いせ辰」は、現在でも、木版画をちりめん加工にする職人を抱えており、元治元年(1864)創業から150年以上もの長きにわたり、千代紙を製作し続けている。

### 【いせ辰家系図】



さて、本資料を販売したKELLY & WALSH L' d.は、向井晃「ケリー・ウォルシュ商会日本関係洋書目録」(『東洋大学紀要課程資格教育センター』5号)によると、当初、ケリー商会 Kelly & CO.は、明治9年(1876)に横浜居留地に設立され、明治19年(1886)にウォルシュが経営に参加し、ケリー・ウォルシュ商会 Kelly & Walsh, Limited となった。大正12年(1923)に、その名があるのが終わり、48年間営業していた。『図説横浜外国人居留地』によると、上海に本店があり、東アジア関係の書籍の豊富な在庫で知られた。書籍・新聞・雑誌のほか、文具・楽器・煙草も扱っていた。

本資料の表紙の下部には、KELLY & WALSH L' d.の下に、Yokohama, Shanghai, Hongkong & Singapore.と記載がある。ケリー&ウォルシュ社は、出版した場所を一番、最初に置いているので、本資料は、横浜で出版された書籍である。このケリー&ウォルシュ社は、長谷川武次郎のちりめん本『日本昔噺』シリーズも取り扱っている。

『江戸の千代紙いせ辰三代』に、明治の頃の「いせ辰」の販売先は、横浜や築地とあり、「いせ辰」と、横浜の居留地にあったケリー&ウォルシュ社との結び付きは想像に難くない。

「いせ辰」が版元となり、彫師や摺師、浮世絵師などの職人を使い、販売先はケリー&ウォルシュ社が担当したのである。

次に、本資料の著者を考えていきたい。表紙にある著者の頭文字、S. L. Gは、シドニー・ルイス・ギュリックを指すと推測される。『キリスト教人名辞典』によると、ギュリックは、アメリカ

の宣教師で、アメリカン・ボード（会衆派系の外国伝道局）に所属した。明治 20 年（1887）に来日し、熊本、松山などで伝道に従事、明治 39 年（1906）に京都に転じ、同志社で神学を講じた。さらに、京都帝国大学や大阪の梅花女子大学でも教えた。

横浜・神戸・大阪などの開港所で発行された在日外国人・機関名簿『ジャパン・ディレクトリー』によると、ギューリックは、明治 22 年（1889）～明治 26 年（1893）には、伯父のオラメル・ヒンクリ・ギューリックと親交が深く、伯父と同じ熊本で活動している。明治 27 年（1894）～明治 29 年（1896）には大阪の居留地に所在、明治 29 年（1899）、明治 30 年（1900）には、松山で活動している。

ギューリックが本資料を手掛けたのは、明治 28 年、大阪の川口居留地にいた時である。来日から 8 年目、本資料には、日本や日本語に対する愛情が随所に表れている。例えば、表紙は港から日本に上陸する人物は、ギューリック自身を表しているかのような挿絵になっている。そして、帽子を被り、口髭を蓄えた、時には葉巻を吸い、パラソルを片手にした人物は、日光の東照宮を彷彿とさせる神社巡り、お茶屋遊び、人力車乗り、骨董屋で土産物の壺を見繕い、蕎麦屋、帰り際のパスポートの確認など、日本の各地を楽しむ。裏表紙では、荷物を渡し、港から荷物を手渡し、帰国の途につく。このように挿絵は外国人が日本を訪れた際の一連の流れになっている。そして、O-hayo（Ohio）、Konni-chi-wa（konee-cheewah）などの日本語がローマ字で入り、括弧の中には外国人が日本語を発音しやすいものに変えたものを併記している。つまり、本資料は、外国人が日本を訪れた際のガイドブックと言ってよいであろう。

本資料の特色は、最初に 4 頁にわたって楽譜が掲載されていることである。譜面の上部に「WORDS AND MUSIC BY S.L.G.」とあるので、ギューリックが作詞・作曲した曲である。本紹介を執筆するにあたり、知人にこの楽譜のピアノ演奏を依頼した。楽譜には「Moderato: a la “Chonkina”」とあるため、当時、日本で流行した「チョンキナの速さで」演奏するという意味である。

楽譜の 1 頁目は伴奏で、2 頁目から 4 頁目にかけて歌詞が英文で入る。その歌詞を翻訳すると、以下

のようになる。

東洋の言語のなかで、私は日本語が好きです。私はここにほんの数週間いるだけですが、私には簡単に思えます。太陽が昇る国について私が知っていることを教えるため、日本で人々がどのように挨拶を交わしているかを話しましょう。おはよう、こんにちは、いかがで、こんばんは。

この歌詞は、日本で流行したチョンキナの歌詞ではなく、ギューリックは、本資料を手掛けるにあたって作成した歌詞だということがわかる。曲は、1 頁目の伴奏の部分は東洋風である。2 頁目の歌詞が入った所で、作風が変わり、メロディがアメリカ民謡のような曲に変わっていく。この曲が何をもとにして作曲されたのは、課題としたい。ただ、加藤延雄「シドニー・L. ギューリック宣教師」（『同志社アメリカ研究』17 号）によると、ギューリックは、明治 39 年（1906）に同志社に着任した時、チャペルで讃美歌の指導をし、非常に綺麗なテナーで歌ったという。本資料の楽譜を作るのに、それ程、苦労しなかったのではないかと推察できる。

繰り返しになるが、本資料は「いせ辰」版のちりめん本である。これとは別に、長谷川武次郎は、明治 23 年（1890）にちりめん本『おゆちゃさん』を、明治 25 年（1892）に『小花三』を刊行している。これらにも、冒頭に楽譜が付いており、本資料との比較を今後の課題としたい。

## 幕末のプロテスタント受洗者・綾部幸熙

中島 一仁

### はじめに

慶応 2（1866）年に長崎でフルベッキから洗礼を受けた佐賀藩親類・村田政矩（若狭）は、長崎港に浮かぶキリスト教書を偶然手に入れ、それをきっかけに信仰を持つに至ったとされる。この数奇な物語の故か彼は比較的よく知られた存在である。それに比べ、同時に受洗した弟「アヤベ」は、これまでほとんどその実像を知られることがなかった。

例えば、『日本キリスト教歴史大事典』でも「村田綾部」などという誤った姓名で記載されているほどである。村田の添え物のように語られてきただけであった。

しかし、その気になって調べてみると、実にたくさんの史料を集めることができた。150 年間もの間、謎の人物であったアヤベの出生から亡くなるまでを可能な限り明らかにしたい。

## 1. 佐賀藩士として

アヤベは、その名を綾部三左衛門幸熙という。佐賀藩家老・鍋島茂辰の子として天保 5 (1834) 年に生まれた。実兄村田とは 20 歳離れており、長兄は藩主の娘を妻とする名門の出身である。名は鹿喜代、鹿之助といった。家禄 458.75 石の藩内では上層に属する綾部家に養子に入り三左衛門と名乗った。佐賀藩は藩士に対し文武課業法という試験制度を設けていたが、幸熙は 23 歳までに儒学や歴史を学ぶ「文」の方で課業修了の「独看」に達した。この若さで独看に到達できる者は極めて少なく、幸熙が勉学に秀でていたことが分かる。

文久 2 (1862) 年に幸熙のその後の人生を決定づける大きな転機が訪れる。藩から長崎で「英学稽古」をするよう命じられたのだ。頭脳優秀であることを見込まれたのであろう。文久 1~2 年に幸熙を含め 7 人の藩士が長崎での英学稽古を命じられているが、いずれも佐賀藩の軍事行政部門である御備方からの派遣であり、藩の軍備増強策のためであった。

長崎では、日本人通詞や在留外国人について英語や数学を習った。その外国人の一人が、米国オランダ改革派教会から日本へ派遣されていたフルベッキであった。兄村田の家来で一足先に長崎でフルベッキに習っていた本野盛亨の仲介であったと推測される。

従来、幸熙は、キリスト教書を拾得し興味を覚えた村田が、教義を学ばせるためにフルベッキのもとに送り込んだとされてきたが、それは誤りであろう。藩命で遊学したことを奇貨として、村田の求めにも応じたとみるのが妥当ではないかと考える。

## 2. 洗礼

村田と幸熙は、慶応 2 年 4 月 6 日 (西暦 1866 年 5 月 20 日)、遂にフルベッキから受洗した。2 人の実父鍋島茂辰の法事が長崎で行われるのを利用したものだった (幸熙はすでに長崎遊学から帰藩していた)。この時の様子はフルベッキが米国の伝道本部に送った報告書で詳しく分かる。

それによると、洗礼式はフルベッキが間借りして

いた寺院の一室の雨戸を閉めて行われた。ランプをともし、テーブルに白い布を広げ、カットガラスの果物皿を洗礼盤代わりにしたという。本野と立ち会い人のフルベッキ夫人が見守るなか、兄弟はキリスト教徒になった。

## 3. 官吏として

幸熙は数学が得意だったようだ。藩の陸軍所で測量学寮長試補や算術小師範を務めたあと、明治 3 (1870) 年、37 歳で数学を学ぶため東京へ行くことを決意する。その際、村田の屋敷を暇乞いに訪れるのだが、恐らくこれが 2 人の今生の別れであったと思われる。

東京でどのように学んだのかは不明であるが、翌 4 年に工部省に出仕し横須賀造船所の「造船少師」になった。数学・英語の知識を買われたのであろう。技術系官吏生活の始まりである。同造船所はのちに海軍省に移管されたので所属の省は変わったが、「覺舎」と呼ばれた付属の技術官僚養成学校の学監を務めたようである。

いったん海軍省はやめ、明治 5 年ごろ陸軍省に再出仕した。ここでは陸軍の営繕組織に属し、「測量」を任務とした。東京の本省にいたことはほとんどなく、仙台・熊本・広島と転勤した。恐らくは各地で建設された軍事施設の図面作製などに当たったのだと思われる。

明治 11 (1878) 年に陸軍省を辞職、9 カ月間、「測量学講習所」という小さな私立学校を東京・銀座で経営したのち、翌 12 年に大蔵省に入り官吏生活に戻った。租税局という徴税部門に属し、やはり半分ほどの期間を岐阜、和歌山での地方勤務で過ごした。16 年ごろ大蔵省もやめた。50 歳であった。

## 4. 学校経営者として

このころ、仕事の上でも生活の面でも幸熙は大きな節目を迎える。まずは、官吏引退後の仕事から見てみたい。

明治 17 (1884) 年、東京・麴町区に「成章舎」という名の私立専門学校を始めた。2 度目の学校経営である。生徒定員 60、敷地 34 坪で、陸軍士官学校などへの進学希望者を対象にした本格的な学校を目指したようである。科目は、修身・漢文・歴史・算術、のちに英語も加えた。



## 5. キリスト者として

次に生活面である。

16年ごろ、幸熙は東京でフルベッキと再会したのだ。受洗の日から一度も会っていないとも考えられ、そうだとすれば約17年ぶりの再会だ。陸軍省の技術者であったことなどを話し、「聖書を肌身離さず持ち歩き、毎日読むことに慣れ親しんできた」と語っている。翌日には15歳ぐらいの娘を伴い、洗礼を施してほしいと頼んでいる。

この後の幸熙は、教会に通えなかった日々を取り戻すかのように明治20(1887)年ごろから少なくとも数年間、メソジスト教会の定住伝道者を務め、布教に当たった。「数寄屋橋教会に加わった」とされる。

得意の学問を生かして学校を経営し、恐らく長年の願いであったであろうクリスチャンとしての日々を送っていた幸熙を、突然大きな悲劇が襲った。明治26(1893)年、実家の甥・鍋島孫六郎の端島炭鉱売却を巡るトラブルに巻き込まれ、新聞に実名でスキャンダルとして書き立てられたのだ。そのあらすじは、幸熙と佐賀閥の大立者・大隈重信が結託して鍋島から炭鉱を取り上げ、その売却金を横領したというものだった。

実際には、財産管理能力に欠け、多額の借金を抱えた鍋島の債務整理であったのだが、大隈の立憲改進黨と自由党との間の政争を背景にして作られたスキャンダルであった。

このスキャンダルは、既に60歳の老境に入っていた幸熙にとって、大きな試練となったであろう。クリスチャンとしてその試練とどう向き合ったのか、深く知りたいところであるが、資料がなく分からない。

### おわりに

以上みてきたように、日本で3番目のプロテスタント受洗者である綾部幸熙の生涯は、英語や数学を中心とした洋学とキリスト教信仰に貫かれたものであった。そしてどちらも1862年に長崎でフルベッキに出会った日にその起点があった。

キリスト教禁制下になぜ、村田と幸熙の兄弟は敢えて洗礼を受けたのであろうか。

明治27(1894)年ごろ、ある牧師が佐賀で村田の孫から聞いた話として次のようなエピソードを記している。

村田は日頃、ロシアを西欧列強にも劣らぬ軍事強

国にしたピョートル大帝を尊敬していた。拾得した聖書を研究すれば西欧の軍人の勇敢さが分かるかもしれないと考えた村田が、敢えて禁書を研究して藩主に提言すべきかどうかを幸熙に聞いたのに対し、幸熙が「有益であつたならばその時始めて建白すればよし、無効のものであつたなら放擲したらよからう」と述べたというのだ。村田と幸熙は、聖書と軍事力を以て、言い換えれば「洋魂洋才」で外圧から日本を守ろうとしてキリスト教信仰へと至ったと推測できるのではないだろうか。

(詳しくは、『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』8・9・10の拙稿をご覧下されれば幸いです(10はこの3月刊行予定))

## へボン夫人クララ・リートの出自

中島 耕二

はじめに

へボン夫人クララについては、へボン博士にとっての「理想的なヘルプミート」(小檜山ルイ)として捉える傾向にある。しかし、グリフィスは伝記『へボン—同時代人の見た』の中で、「博士に劣らぬ優れた人格者であったクララは後に日本で多くのアメリカ海軍の将兵たちを暖かく自分の家庭に迎え、あるときは日本を知らない彼らの案内役として、ある時は哲学者のように、またあるときは、友人として親しく彼らに接し、尊敬され、慕われた。日本の女子教育に尽力し、クララの薫陶を受けた多くの女性にとって、へボン夫人は忘れ難い存在となった」(pp30-31)と述べ、いち早くクララの主体性を指摘していた。へボン研究家高谷道男教授も晩年、「これからはクララを調べる」と良く話され、クララ研究の必要性を訴えておられた。

本稿では、高谷教授の遺志でもあった「クララ研究」の手始めとして、「クララの出自」を検討して、彼女の「主体性」の源泉を明らかにしたいと考える。

### 1. クララの生い立ち

クララは1818年6月25日、アメリカ合衆国コネチカット州ギルフォード(Guilford)で、父ハービー・リート(Harvy Leete, 1797~1852)21歳、母サリー・フォウラー・リート(Sally Fowler Leete, 1800~1820)17歳の長女(長子)として生

まれた。正式名はクラリッサ・マリア・リート (Clarissa Maria Leete, 1818~1906) と言う。生家のリート家はクララから数えて、七代前のウィリアム・リート (William Leete, 1612-1683) が、1639 年にイングランドから北米ニューヘブレン・コロニー (New Haven Colony) に入植したのが初代である。

ウィリアムはケンブリッジ大学を卒業し、英国国教会王室裁判所係官となりピューリタンを取り締まる側にいたが、やがて改宗して本人がピューリタン (会衆教会信徒) となり、信教の自由を求めて新大陸に渡った。彼は信仰心が篤く、1643 年にはギルフォード第一会衆教会 (The First Congregational Church of Guilford) の設立者の一人となった。やがて、持ち前の優れた行政能力を発揮し、コネチカット植民地州の監督官や副知事を経て、1676 年に第 22 代コネチカット植民地州知事 (22<sup>nd</sup> Colonial Governor of Connecticut) となり、州都のハートフォードに転居した。彼は惜しくも現役の知事のまま 1683 年に亡くなった。二男のアンドリュー (Andrew Leete, 1643-1702) もコネチカット植民地州の行政に携わり、イエール大学 (1701 年創立) のコネチカット州招致メンバーの一人であった。その子孫は代々ニューヘブレン近郊に住み広大な土地を所有し繁栄を誇った。ちなみに現地にはリート通り、リート島、リート島通りなどファミリーゆかりの地名が残されている (資料: Connecticut State Library, Hartford)。

## 2. ニューイングランドから南部へ

クララが 3 歳の時、妹のサラ (Sarah) が生まれた。ところが、その直後母のサリーが産後の肥立ちが悪く、1820 年 10 月 21 日に 20 歳の若さで亡くなった。父ハービーはほどなくして、幼い二人の娘を連れてノースカロライナ州ファイエットビル (Fayetteville, North Carolina) に移住した。ファイエットビルは一時州都になったこともある主要な町であったが、何故ハービーがニューイングランドから南部に移住したのかその理由は不明である。ハービーは 1823 年 6 月、同地でサラ・アン・クック (Sarah Ann Cook, 1800-1872) 23 歳と再婚した。クララは実母の記憶もおぼろげな中で、5 歳の時に継母を得たことになる (資料: Cross Creek Cemetery, Fayetteville, NC)。

その後、腹違いとなる弟三人と妹一人が与えられたが、妹のイザベラ (Isabella Amanda, 1830-1913?) と弟チャールズ (Charles Edward, 1826-1867) の娘ルイザ (Louisa Arlena, 1855-1893) は、後にクララを慕ってアメリカ長老教会の女性宣教師となり来日することになる。父ハービーはその後、スーパーマーケット等の経営に成功し町の有力者となった。またファイエットビル第一長老教会の信徒として、1837 年から亡くなる 1852 年まで長く筆頭長老 (Ruling Elder) を務めた<sup>(1)</sup>。

クララは故郷を離れるまでこの教会に通い、ヘボンとの結婚式もこの教会で行った。この教会は中国や日本 (のちに朝鮮も) に宣教師を送り出し、継続的に資金援助を行っていたが、クララはもとより妹のイザベラ、姪のルイザ達の日本における伝道費用もこの教会から支援が行われていた (資料: The First Presbyterian Church, Fayetteville)。

## 3. クララの教育的背景

クララは学齢期に達すると、1815 年創立のファイエットビル・アカデミーに入学したと思われる。残念ながらこの学校は現存せず学籍簿も所在不明であるため、クララの在籍は確認出来ていない。しかし、当時、町で唯一の男女を対象にした中等教育機関であり、またファイエットビル第一長老教会の指導のもとに歴代牧師が校長を務めていた関係から、クララがこの学校で学んだ可能性は高い。アカデミーには女子部、上級部および男子英語部の三部が置かれ、女子部のカリキュラムには英語文法、地理、歴史、年代学、神話学、修辞学、作文法、文章学、植物学、裁縫、音楽、図画、フランス語などが選択科目として置かれていた。上級部はラテン語、ギリシャ語、哲学、論理学、天文学、数学、幾何、代数などが生まれ女子も進学できたが、クララが女子部を修了したあと上級部で学んだか否かは不明である。クララはヘボン塾や横浜英学所で英語以外の科目、例えば幾何や代数など当時の生徒たちに求められていた科目を教えることはなかったことから、上級部の授業は取らなかったものと思われる。当時、南部の地方都市にあって、女子が上級課程に進むのは極めて稀なことであった。やがてこの学校は 1835 年に女子部が独立し、ファイエットビル女学校 (Fayetteville Female Seminary) となった。ちなみにクララの 12 歳年下であった妹のイザベラは、

1848年にこの女学校を卒業している。このことから、クララがファイエットビル・アカデミーで学んだことはほぼ確実と考えて良いと思う。

#### 4. クララの自立とヘボンとの出会い

クララは学業を終えると、1838年前後に故郷を出てペンシルバニア州ノリスタウンの従兄弟の経営するノリスタウン・アカデミーの助教となった<sup>(2)</sup>。当時、二十歳にも満たない女性が一人遠く実家を離れ、自立を目指すに至った経緯は、いろいろなことを連想させるが、その決意の背景にはクララの家庭環境が影響していたように思われる。年齢の近い継母と異母兄弟たちとの関係など、クララの自立には自分では解決できない人生に対する悩みが存在していたと思われる。こうした折にノリスタウンの町<sup>(3)</sup>で、診療所を開き家族との確執を抱え、将来の生き方に悩む青年医師ヘボンと出会った<sup>(4)</sup>。二人は海外伝道を語り合い、将来に希望を見つけて結婚の約束を交わした<sup>(5)</sup>。しかし、ヘボンの家族はヘボンの海外伝道に猛反対であった。

クララはヘボンとの結婚式を一ヶ月後に控えた1840年9月20日、自分と同じ両親から生まれた唯一の姉妹であった妹のサラを亡くした。実母と同じ20歳という若さであった。クララに取っては、生涯の伴侶を得ると同時に最も近い肉親でもある実妹との別れという、複雑な思いの門出となった。

ヘボンは家族の反対を押し切り長老教会海外伝道局に宣教師志願をし、10月27日、クララの母教会ファイエットビル第一長老教会でヘボン側家族の出席のない結婚式を挙げ、二人はボストンの港からクララの父ハービーと海外伝道局ラウリー主事のたった二人に見送られ、見知らぬ東洋の地に赴いた。これは1841年3月15日のことで、ヘボン博士25歳、クララ22歳の時であった。

おわりに

クララの自立および東洋伝道を覚悟したヘボンとの結婚の決断、これらの検証によってクララの「主体性」を感じ取ることが出来た。彼女のこの主体性が、のちにシンガポールでの英学塾、日本でのヘボン塾、横浜英学所、日曜学校、住吉町小学校等の指導と経営となって示された。更に加えれば、後年、クララが日本に滞在中、妹のイザベラと姪のルイザが宣教師として来日したことが挙げられる。このこ

とは、クララが積極的に身内に対し日本への伝道の誘いをしていたことを示し、クララが夫ヘボンを支えた「良きヘルプミート」であったとともに、それを超えた高い「主体性」を備えた人物であったことの明確な証左となるであろう。

2018年はクララ夫人生誕200年となる。「クララ先生」に大きな注目が集まるように活動して行きたい。

注：

(1) リート家はアメリカ初代以来会衆教会信徒であったが、南部には会衆教会が少ないことから、Plan of Union (1801年の会衆教会と長老教会の協働契約) の関係にある長老教会に所属したものとされる。この契約は19世紀のアメリカの急激な膨張により教職者の不足に対処するものであった。当時のアメリカの膨張は、想像を絶するスケールとスピードであった。ちなみに国土は、独立以前の1775年では120万平方キロ(日本の3倍)であったが、1853年には782万平方キロ(日本の20倍)に一気に拡大した。人口も独立後間もない1783年には400万人足らずであったが、60年余りのちの1846年には5倍の2,000万人に増大した。

(2) グリフィスは伝記『ヘボン』の中で、クララは従兄弟の経営するノリスタウン・アカデミーで教鞭をとったと述べている。実際に調べたところ、1840年頃Norristown Academyは存在したが、教員や生徒等の記録の存在は確認できなかった(調査: Norristown Historical Society, PA)。

(3) ヘボンがノリスタウンで診療所を開業したのは、母のアン出身地であったことと関係している。ヘボンの祖父スレータ師が牧会していた教会もノリスタウン近郊にあった。

(4) ノリスタウンの町のどこでヘボンとクララが出会ったのか、ヘボン夫妻もグリフィスも何も語っていない。そこで最も可能性の高いと思われるNorristown Presbyterian Churchに確認したところ、古い資料はないとの回答で、二人の出会いが長老教会の礼拝であったかどうかは確認出来ていない。ある日クララが風邪を引いて、「ヘップバーン診療所」に診察を受けに行ったのかも知れない。

(5) グリフィス著、佐々木晃訳『ヘボンー同時代人の見た』(教文館、1991年) p30

## 《参考》

Harvey Leete (1797-1852) =

① Sally Fowler (1800-1820)

- ・長女 Clarissa Maria Leete (1818-1906)
- ・二女 Sarah Leete (1820-1840)

② Sarah Ann Cook (1800-1872)

- ・長男 Charles Leete (1824-1826)
- ・二男 Charles Edward Leete (1826-1867)

= Sarah Louisa Hawley (1826-1857)

- ・Frank Harvey Leete (1853-1857)
- ・Louisa Arlena Leete (1855-1893)

1878 年来日、1886 Rev. Bryan Grinan  
と結婚、1893 年日本で死去

- ・三男 William James Leete (1828-1873)
- ・三女 Isabella Amanda Leete (1830-1913?)  
1881 来日、1898 年帰国
- ・四男 John Henry Leete (1837-1866)



後列左から 息子サムエル、ルイザ、イザベラ  
前列左から サムエル妻クララ、ヘボン、クララ  
(1890 年 10 月 27 日 於:横浜 ヘボン博士夫妻金  
婚式の日に撮影)

## 【横浜プロテスタント史研究会】

ホーム・ページ <http://yokoproken.com/>  
中井幸夫さんが毎月更新しています。ご覧下さい。

会費：年額 2,000 円

郵便振込番号 00290-5-50622

加入者名 横浜プロテスタント史研究会

## 【研究発表リスト (その39)】

第 374 回 2015.11.21 榎本 千賀

「ちりめん本とシドニー・ルイス・ギューリック  
宣教師」

第 375 回 2015.12.19 中島 一仁

「幕末のプロテスタント受洗者・綾部幸熙」

第 376 回 2016.1.16 中島 耕二

「ヘボン夫人クララ・リートの出自」

第 377 回 2016.2.20 齋藤 元子

「女性宣教師ベル・マーシューその書簡にみる  
米国長老教会女性海外伝道協会の特徴」

## 【会員異動】

### 《入会紹介》

- ・川村洋士氏 横浜海岸教会の会員、横浜海岸教会 150 年史の編纂委員です。
- ・中島一仁氏 朝日新聞社勤務、「幕末のプロテスタント受洗者・綾部幸熙」を発表された。
- ・竹内智子氏 声楽・キリスト教音楽を専攻  
恵泉女学園大学や青山学院大学で教えています。

## 【編集後記】

会員の報告です。この度、川島第二郎先生が当研究会を辞めることになりました。港南台から娘さんが住む東村山の方に越されました。研究活動が困難ということがその理由です。川島先生は、この研究会の創立期からの会員で、「聖書と訳史—明治期バプテスト訳を中心に」というテーマで研究され、その道の第一人者です。『ジョナサン・ゴープルの研究』を新教出版社から出版、またネーザン・ブラウンの研究をするなかで、『新約全書「志無也久世無志與」』を現代仮名字体版にして出版、さらに 1880 年版ネイサン・ブラウン訳『志無也久世無志與』（しんやくぜんしよ）の貴重本を覆刻出版、同時に別冊川島第二郎著『ネイサン・ブラウンと「志無也久世無志與」』なる著書を刊行、高い評価を受けました。先生の聖書と訳史の研究については、あらためて述べなければならぬと思いますが、退会されるに際しまして、一言述べさせていただきます。

現在毎月 105 名に案内を出しています。会員が増えて嬉しい限りです。来月の発表者は誰に依頼するかということになりますと研究会が立ち行かなくなります。3カ月前まで発表者を決めるようにしていますが、難しい時もあります。発表可能な方、また推薦して頂ければこちらで交渉します。事務局までお知らせ下さい。助かります。（岡部一興記）